

東日本大震災復興支援フォーラム

日時：平成28年1月16日(土)15:00~17:30

場所：神戸クリスタルタワー3階クリスタルホール

開会・あいさつ（ひょうごボランティアプラザ 鬼本所長代理）

本日はお忙しい中、そして遠く被災地から東日本大震災復興支援フォーラムに御参加いただきまして、ありがとうございます。東北からお越しいただいた皆様は、昨日、早朝バスで出発されて、一日がかりでこの神戸にこれれました。

明日で、阪神・淡路大震災から21年目を迎えます。この時期に被災地から皆様をお迎えし、この5年間、自らの21年前の大震災の恩返しという意味も込め、兵庫、神戸の力、被災地を支援した私たちが集い、現在の被災地の状況をお聞きし、これからの支援の思いを新たにす機会、このような場をここで持てますこと本当にありがとうございます。

死者・行方不明1万8千人を超え、発災後1週間の避難所の生活者が38万7千人を超えるという未曾有の大災害から間もなく5年になります。被災者の方々は、忘れることのできない災害の恐ろしさ、御家族を失われたかもしれない、そういう深い悲しみの中とはいいながらさまざまな苦しみ乗り越えて暮らし再建を進めてこられました。そして、発災直後から被災地や全国や災害救援機関、そして行政、救援、復旧、復興に取り組みされました。また、ボランティアの方々が直後から駆けつけ、救援、復旧、復興そして寄り添い支援ということで現在まで活動を続けています。

この5年で被災地はさまざまな苦難を乗り越え、避難所から仮設住宅、復興住宅など恒久住宅へと暮らし再建の歩みを進めてこられました。工場や農地の再建、交通機関の復興、新設など、復興の歩みは進んでいるように見受けられます。しかし、その歩みというのはいろいろな異なる事情の中で仮設住宅から恒久住宅への移行が、まだめどの立っていない方もたくさんおられます。町の人口流出、生活基盤の喪失あるいはコミュニティの崩壊、決してもとの生活には戻らないというのも事実です。また、5年が経とうとして、全国的には東日本大震災の被災地への支援の輪は減じつつあるとも言われています。

本日は、遠く東北の地から、仮設住宅、復興住宅にお住まいの方々をお招きし、この場を設けさせていただきました。

こういう方で皆さんを神戸にお招きする機会を捉えまして、ボランティアプラザが実施または助成したボランティアバスがこの5年間で464台、1万1千人の方がこれを使

って現地に行っていただきました。そのバスを利用した活動の中で支援を続け、被災地の皆様とある意味では絆を築いてきた方、若い人といえば、今回参加の県立大学、神戸学院大学、神戸親和女子大学、兵庫大学等々、大学の皆さん、さらには神戸高校、葺合高校等、県立高校の皆さんです。この方々は、阪神・淡路大震災の記憶が余り多い方々ではございません。そういう方々も含め兵庫、神戸のボランティアが被災地の方々と御一緒に話をお聞きし、ここにこれからの支援と想いを新たにすると、そのような形にしていきたいと考えております。

今回、東北の被災地の皆さんをお招きしてこうした機会を設けることができたのは、日本イーライリリー社様、兵庫開発有馬ロイヤルクラブ様、そして兵庫県立高校、神戸高校の皆さん、水墨画家の向山和子さんなどの多大な御寄附の中で読売新聞社初め各方面の御支援でやっと開催することができました。また、開催の進行においては現地被災地からずっと支援を続けている村松先生、そして神戸から支援されている野崎先生、東末先生にも御支援をお願いしております。また、兵庫県からも多大な支援を受けております。そういう多くの方々の中で今日こういう形でフォーラムを開催できましたことを各方面に感謝いたしますとともに、支援の想いを新たにすると、そういう場としてこの会議が実りあるものを期待いたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。

基調報告（村松淳司東北大学多元物質科学研究所長）

東日本大震災は、人的被害は1万8,000人ぐらいで、震災関連死がかなり多くなっています。名取市の閑上は、5,000人ぐらい住んでいましたが、昨年12月29日に飛行機から撮った写真を見ると全く何もない状況が今も続いています。被災地は瓦礫等が片づいただけで基本的には何も変わっていません。

「東日本大震災からの復興に向けた道のりと見通し」の「まちづくり（高台等への集団移転等）」は、進捗状況が全体計画に対する造成工事の完成見込み地区の割合が47%で災害公営住宅の完成見込みの戸数の割合が63%で、復興の道半ばです。避難者数は、当初は発災直後の47万人から17万人と減っていますが、まだ17万人います。

これは仮設住宅と、みなし仮設、親戚等に避難している人を含んでいます。去年に比べると3万人減っていて、「終の住みか」に移っている人も多くいます。宮城県がメインですが、「住まいの確保に関する事業」は、大体平成30年度まで続くところが多いです。

宮城県に絞って話をします。気仙沼市、南三陸町、石巻市、女川町、東松島市、松島町、塩竈市、利府町、七ヶ浜町、多賀城市、仙台市、名取市、岩沼市、亶理町、山元町、これが沿岸部の市町村になります。ここの市町村は全部津波被害を受けて、この中で死者が出なかった市町村はありません。

「市町の震災復興計画」は、各市町村のほとんどは32年度までの計画が多いです。メインのやり方は2つあって「高台移転・職住分離イメージ」で、南三陸町がいい例ですが、13メートルのかさ上げをして、13メートルの上に住居をつくって漁業はその下でやるというものです。名取市の閑上は大きなかさ上げはなくて、例えば岩沼が代表例ですが、もともとあった造成した団地に移っていて、既に移転は終わっています。このような2つのイメージで進んでいます。

次に「鉄道」「道路施設」ですが、「道路施設」はほぼ終わりました。「鉄道」はあと常磐線が残っています。気仙沼線はバスの代行輸送を続けていますが、多分、鉄道の復活はないと言われています。仙石線は、「宮城県第一の都市」の仙台と「第二の都市」の石巻を結ぶ大動脈ですが、去年の秋に全線開通しました。

「復興に向けた主な取組状況」で、「求人・求職のバランス」ですが、「有効求人数」と「有効求職者数」のアンバランスが続いています。若者が被災地から離れる要因となっています。

他の復興状況は、「農地関係」が着手約96%、完成約87%と進んでいて、進んでい

ないのは「海岸防災林」が着手約57%、完成約21%、「漁港（復旧工事）」が着手約83%、完成32%と進んでいません。ほぼ復興を諦めた漁港もあり、それは石巻の半島部です。これは人がいなくなったせいもあります。

これに伴い「港湾施設」の復旧状況は、着手が約84%、完成が約47%と遅くなっています。「海岸保全施設（復旧工事）」着手が約95%、完成が約18%と全く進んでいないという状況です。

全体的なまとめですが、市町村別で、ポイントを挙げると女川町と名取市の復興が非常に遅れています。女川町は、大規模な移転で今造成がほぼ終わりかけています。少し前に女川の駅ができて、温泉もありますが、駅前に商店街もようやくできました。女川の復興はこれから加速されるでしょう。

災害公営住宅の整備状況は、平成25年11月末に完了したのが栗原市と美里町という沿岸部でないところですが。平成26年11月には進んでいるところとそうでないところの差がついています。最新のデータは平成27年11月30日ですが、整備がほぼ終了したところがあるものの、目立って少ないところもあります。それが、名取市、南三陸町です。南三陸町は、13メートルのかさ上げが終わらないと進まないということで、南三陸町自体着工は100%です。名取市の着工戸数の進捗率が57.1%というのは非常に少ないです。完了戸数の進捗率がまだ12.8%で、これは問題です。

この復興格差の原因を2つ例示しますが、東松島市全体の復興の予定を見ますと小松谷地地区は、矢本インターのすぐそばにあり、ショッピングセンターもあって利便性が高い地域です。平成26年4月から入居が始まり、この辺を中心に非常に早い状況でしたが、野蒜（のびる）北部丘陵地区はそれに対して非常に遅いです。これは山を切り開いていて、大規模な造成工事をしているからです。仙石線が昨年10月に全線開通したことから造成工事もほぼ終わりに近づいています。ここはもともと山林だったのですが、住宅地になって、今はかなりできています。

被災地に何が必要かを最後にまとめますが、まず福島県の特異性です。きょうは宮城県の話をしてきましたが、福島の特異性としては、震災関連死/震災死亡者の比が宮城県と岩手県はほぼ0.1です。阪神・淡路は、9年目のデータですが0.15ぐらいです。福島県は、1.2で既に震災で亡くなった方を震災関連死が上回っている状況です。いろいろな理由があるので説明はしませんが、このような特異性があります。

もう一つ、福島県の子供たちの発育の問題が悪いということが今月号の日本学術会議の

会誌に載っていますが、福島の子供たちの生育状況が悪いと言われています。

それから、これは女川町の人口の減少の問題ですけれども、女川町は震災時人口が1万人を若干超えていましたが、今は7,000人を切っています。3,000人が減少しました。ここは1,000人の人が亡くなりましたが、プラス2,000人が町外に出てゆき人口が7割になりました。最新の国勢調査の結果によると6,000人台になっています。同じように女川町に近い防災庁舎で有名な南三陸町ですが、ここも最初はゆるやかなスピードの過疎化でしたが、2011年1月頃からその過疎化のスピードが加速して非常に減っています。1万8,000人以上いたのが、今はもう1万4,000人を切り、1万3,000人台になっていて厳しい状況です。国勢調査の速報が1月12日に出ましたが、一番減っているのは石巻市です。次に気仙沼市、南三陸町と津波の被害がひどかったところほど減っています。

それから、人口増減率が一番高いのは女川町で37%減っています。これでは行政の自治体としては成り立たない状況です。南三陸町29%、山元町26.3%というふうに津波にあった地域は大幅に減少して厳しい状況です。

別の話ですが震災孤児、震災遺児が、阪神・淡路のときは700人ぐらいでしたが、東日本大震災では約1,700人の震災遺児、震災孤児がいます。

それから、「児童に震災が影響してるか」というアンケート調査では、「ある」と答えた校長が7割です。震災の影響が児童に厳しいというのは確かで、今こそボランティアが必要です。「人が人として生きるための支援」が必要だということで長引く仮設住宅生活、それから復興のスピードの差があり、これから「仮設住宅」から「終の住みか」へ移るというわけで、ボランティア活動として「人が人として生きるための支援」が必要だということです。今、震災がつむぐ心の支援としては、「人が自立するための支援」、「人が人として生きるための支援」が必要だと思います。

パネルディスカッション

(コーディネーター) 古谷禎一読売新聞大阪本社 編集委員

(パネリスト)

村松淳司東北大学多元物資科学研究所所長

長沼俊幸宮城県名取市、愛島東部団地仮設住宅自治会役員

菅原 司宮城県東松島市、小松南住宅自治会会長

湯河沙妃特定非営利活動法人 ワカモノヂカラプロジェクト副代表

辻 俊介兵庫県立大学 学生災害復興支援団体1 a n

○古谷氏 ボランティア元年と言われた阪神・淡路大震災から、明日で21年、村松先生から東北の現状について報告いただき、共有した上で「阪神・淡路大震災を体験した私たちに何ができるのか。」そして、パネリストの若者2人は年齢的に、阪神・淡路大震災の記憶もないですが「この神戸で生活をしながらこれから東北にどのような支援をしていけばいいのか」、そのような方向でまず議論を進めていきます。

基調報告からの「復興の格差」という部分、それから被災の沿岸部を中心に人口が減っていて、「人が人として生きるための支援」が求められているという報告がありました。まず、長沼さんから「現在の状況とこれからどういう支援が必要なのか」についてお聞きします。

○長沼氏 私が住んでいた閑上（ゆりあげ）地区は、今、被災地の中でも復興が進んでいない地区で、ようやく土地のかさ上げが全体の3分の1、昨年7月に完了して、第1回目の公営住宅の建設となります。1期、2期、3期工事として3回に分けて「閑上」というできた町に住民が戻っていくことになる。今までの5年間仮設住宅で暮らし、そこでいろいろな方々の支援をもらい築いてきたコミュニティが、7月からばらばらになり、その後3年をかけて一つの大きい町に住民が移ることになる。その場合、先に公営住宅に移る住民の心、仮設に残されていく住民の気持ちというものを考えると、やはりボランティアの力を借りながらやっていかなければいけないと思っています。

○古谷氏 長沼さんは仮設住宅での生活が5年近くになって、まだこの先いつになったらもとの生活に戻れるかという見通しもまだ立っていない状況だそうですね。

○長沼氏 そうです。一部の人は今年の7月ごろに、ある程度の動きが出てくると思いま

すが、その半分以上の人がまだ見通しも立っていません。

○古谷氏 そうした中で今年、被災地では、仮設住宅から復興公営住宅への引っ越しが本格化すると聞いています。菅原さんは2014年4月に復興公営住宅に移られたということですが、復興公営住宅に移られた後、コミュニティの問題やいろいろな問題があるなかで、自治会長もお務めということですが、そのあたりのご苦労についてお話しください。

○菅原氏 私は東松島市の災害公営住宅の市営小松南住宅で、2014年6月から自治会長をしています。私も震災後、3年間はプレハブの仮設住宅にいて、2014年4月から災害公営住宅に入居しましたが、当初から自治会長をしています。当初は見えなかった課題が少しずつ見えてきたのでそれについてお話しします。

仮設住宅に入居して間もなくは震災直後で気持ちも住まいもみんな混乱している状況下がありました。現在は仮設住宅から離れて住まいに関してはもう復興したわけです。住まいが復興して間もなく2年経ちます。ただ、問題は「心」、「気持ち」だと思います。私は自治会長という立場で行政やいろいろな人とも話す機会が多いです。小松南住宅は156世帯で300人ほどの住民が住んでいて、いろいろな住民とも話す機会があります。自治会長としていろいろな課題も見えやすい立場にありますが、そろそろ気持ち的な復興、住まいは復興したが、心のほうが遅れているというか、被災の程度もみんな違うし、一概に「いつまでに気持ちを復興しないとだめだ」とは言えませんが、震災から5年たっても、入居して2年たってもそのままの気持ちでいる人がほとんどです。私が今ここで話をしていることは300人の住民の声とは違うと思います。これは、私が自治会長としていろいろな人、行政ともいろいろ話し合っていることですが、住民の代表した声とは違いかもかもしれませんが、「気持ちの復興」がなかなか進んでいないと思います。私が今の立場上で思っているのは、「自助、公助、共助」と3つが言われますが、そのうちの「共助」について私は余り心配していません。これはある程度、時間が解決してくれます。ただ、私が気になっているのは、「公助と自助」というところの関係です。震災直後は当然「公助」、公のところいろいろな物資的なもの、経済的なものでも頼る部分が大きかった。これは当然ですが、いまだに「自助」という部分に考え方がシフトしていない人がほとんどです。仮設から出て2年がたって、私は「もう2年」たったという気持ちでいますが、ほとんどの人は「まだ2年でしょ」という考えで、その辺の違いもあります。私はそろそろ仮設住宅から離れて2年、震災から5年という今の時期で、そろそろ「自助」という考え方も出てきていいのかなと思っています。

○古谷氏 長沼さん、菅原さんからいずれも「心のケア」というような話がありました。そうした中で、兵庫県の若者を代表して、辻さん、阪神淡路大震災はご存知ですか。

○辻氏 僕は、まだ1歳だったので・・・。

○古谷氏 その辻さんが、宮城県の南三陸町においてボランティアとして「スマイル健康塾」で活動されています。「心のケア」という部分が共通していると思いますが、どのような活動をされ、それに対してどういう手応え、反応があるのか、お話しください。

○辻氏 僕は宮城県の南三陸町にお世話になっていて、宮城大学の学生と一緒に「スマイル健康塾」という催し物を実施しています。この「スマイル健康塾」は、仮設住宅には、もともと同じ地域に住んでいた方々がばらばらになり、いろいろな仮設住宅に住んでいますが、その方々を一カ所に集めて久しぶりに交流をとってもらい、その際に併せて学生と一緒に体操とかして心を開放してもらおうというものです。兵庫県立大学は劇とか踊りとかの催し物をして、集まったお年寄りの方々に楽しんでもらう活動をしています。

○古谷氏 一軒一軒訪ねて行き、声かけをしているのですか。

○辻氏 その声かけは宮城大学の学生にお任せしていて、僕たちは劇をして、劇もその場で考えてという感じでやっています。

○古谷氏 長沼さん、若い学生さんが仮設住宅に来てくれると、お年寄りも反応が全然違いますか。

○長沼氏 違いますね。高齢の人たちは、若い人たちを見るとそれだけで若返り、若者と話をするだけで少し気持ちが若くなる、明るくなるということは多々あると思います。

○古谷氏 出ていくきっかけ、話をするきっかけができるだけでも違うということですね。続いて、関西の若者たちが東北の復興の支援にどういうことができるかということで、これは幾つかの大学でつくっている「ワカモノヂカラプロジェクト」、そのグループの副代表の湯河さんに「現在の活動とボランティアのやりがい」についてお願いします。湯河さんも辻さんと同じように阪神・淡路大震災をほとんど知らない世代です。

○湯河氏 ボランティアの果たす役割として私が活動を通じ感じるの、ボランティアをすると「たくさんの人と出会える」のが大きな魅力です。私たち若い世代は、地域の大人の方とか世代の違う方とあまりお話をする機会がないので、ボランティアを通して話したりして、さまざまな文化を知ることにより、社会人としての基盤をつくるものとして、ボランティアはすごく意味のあるものと考えています。

○古谷氏 仮設住宅を訪ねると、歓迎されるし、お年寄りたちと接していてどんなことを

感じますか。

○湯河氏 被災者の方と話をしていたら大変な思いをされたと思うのに、私たちが関西から来たということだけで、「よく来てくれたね」というふうに言っただけです。こちららは「元気をあげなくちゃ」と思っているのに、実は私たちが元気をもらっているというのを感じます。

○古谷氏 村松先生、この若者2人の話を聞かれて、「人が人として生きるための支援」が必要だと言われましたが、このような若者の声をどう思われますか。

○村松氏 本当に力になっていただけたと思いますし、若い人がお年寄りと接することによってお年寄りが外に出ることにつながります。福島の問題で「震災関連死」について話しましたが、決して宮城も岩手も人ごとではありません。「震災関連死」が防止できるし、「コミュニティの形成」にも繋がると思いますので、必要な活動だと思います。

○古谷氏 去年のフォーラムでも話しましたが、ボランティアは、阪神・淡路大震災のあった1995年が元年と言われて確かに広がってきていますが、『まだまだ「ボランティア文化」は定着していないのではないか』と、ボランティアプラザの所長の室崎先生も言われています。「現在のボランティア活動の課題とこれからのあり方について」はいかがでしょうか。

○村松氏 これまでだと、例えば「何かをしてあげる」とか、こういうものを持っていくと喜ばれるとか、物質的なボランティアが多かった。例えば引っ越しの手伝い、何かの漁具の修理、農地の開拓があったのですが、これからはそういうものではなくて「人が人として生きるため、そこで生きていくため」の支援。「S t a n d - b y - m e」と私は呼んでいますそのような支援が必要です。支援が非常に必要で、それも被災者一人ひとりに必要なので、まさに「もうすこしたくさんボランティアに来てほしい」という状況です。

○古谷氏 ボランティアの数は、どうして減っているのでしょうか。

○村松氏 多分ニーズが見えてこないのだろうと思います。私どものPRも足りないのかもしれない。

○古谷氏 確かに震災直後だと、瓦礫の片づけ、泥出し等比較的わかりやすい活動が中心です。5年近くになって「心のケア」が求められるものの、何をしていいのかわからないという面もあるのではと思います。

○村松氏 そのとおりで、実際に自分が行って何が貢献できるのかというのがわからないかもしれません。例えば足湯で足を洗ってあげて、そこで会話をすることだけで十

分です。むしろ、それさえ要らなくて、集会所に行って一緒にお茶を飲んであげるといっただけで十分です。そういうボランティアがまさに必要で、そういうものがないとまた悪い夢を見てしまうということになってしまう。

心の支えのために「人が人として生きるためのボランティア」というのは非常に重要だということを皆さんに御理解いただき、決して力仕事も何も要らない。「来るだけでいいです。毎回足を運んでくれるだけで」それが最大のボランティア活動になります。

○古谷氏 長沼さん、先ほどのお話の中でコミュニティについて触れられました。その「コミュニティ形成」にあたってボランティアはどのような支援ができるのでしょうか。」

○長沼氏 閑上の場合、3年をかけて公営住宅という「終の住みか」に移転します。そこにみんなが行ったときに、今まで仮設で一生懸命、無我夢中で5年間生活してきたものがみんな気の抜けたようになると思います。そうすると、閉じこもる人、少し気持ちが安心してしまい外に出なくなる人が多くなってくると思います。そのような人たちを外に引っ張り出すという力は、地元の人ではなかなかできない、不可能なことです。これまでの仮設住宅でもそうでしたが、いろいろなボランティアの力を借りて、いろいろなイベント等の催しをして、まず出てきてもらうということが一番大事になると思います。

○古谷氏 湯河さん、辻さん、長沼さんの話を聞いて、「これからこんなことをやれるのではないかとか、こんなことをやってみたいというふうに感じることはないですか。」

○湯河氏 復興住宅に移られてなかなか外に出る機会がなくなるのではということなので、イベントなど単発でも続けていくことが大事だと思います。

○辻氏 僕は兵庫県立大学の「学生復興支援団体lan」に所属していて、福島にも行っています、そこで「野馬土カフェ」という現地の産直所でお祭りをやりました。

子供が来てくれるとお年寄りの方もこられます。大変評判がよかった。

○古谷氏 先ほど「来てくれるだけでいい」というような話がありまして、当然ボランティアの大切さ支援の継続の必要性というのはあるのですが、その一方で、「自助・共助・公助」という中で、「自立」という部分も忘れてはいけないという話がありましたが、「それについてはいかがでしょうか。」

○菅原氏 物質的な支援や役務的な支援をずっと震災直後から続けてもらっていますが、私の個人的な考えとしては、もう5年たって、住民もいつまでもそのようなものに頼っていてはだめな時期に来ているのではないかと考えています。「今後のボランティアに期待

したい」ことは、物質的・役務的なものだけではなく、例えば今、東日本大震災からちょうど今年で5年が経過していますが、阪神・淡路大震災の5年後というと平成12年頃になります。そのころの実情はどうだったのか。東日本から見ればまさに今の時期がちょうど5年に相当する時期です。それから阪神・淡路から20年後といえますとまさに今ですね。東日本からいえば今から15年後がちょうど20年目となります。その辺りのお話を、今日ここでということではなくて、私たちの地元に来てもらえるのであればそういう話も、「5年後はこうだった」とか、「20年後の今はこうだ」というふうな精神的な心の面のお話をしてもらえればと思います。これについては、行政等に期待しても無理な話だと思うので、ボランティアが来られたときにしていただきたい。単純に比較はできないと思いますが、「こうだったんだよ」と話してもらえれば非常に助かると思っています。

○古谷氏 きょう会場にいらっしゃる方の中には、本当に何十回も東北の被災地にボランティアに行かれて、仮設住宅とか復興公営住宅を訪ね、阪神・淡路大震災の御経験を話されている方もおられると思います。阪神・淡路大震災から5年後は、仮設住宅がちょうど解消された時期ではなかったかと思います。東北の場合は、もとの土地を回復するために時間がかかるので復興は決して早いとは言えないと思います。しかし、その中で「私たちが阪神・淡路大震災の教訓から何をしていかなければいけないのか」ということを、若者を代表して湯河さんお願いします。

○湯河氏 やはり関西にいと東北の現状は伝わりにくいので、私たち災害復興支援団体の若者が被災地に行き、そこで肌で感じて、目を見たことを関西に持ち帰り、みんなに伝える。「復興はまだ終わってない」ので忘れてはいけないとか、「これからも支援をし続けていかなければならない」ということを伝え続けることがこれからの支援ではないかと思っています。

○古谷氏 これは我々、新聞社に勤務している人間に対して、何か東北の記事が減ったのではないとか言われたりもするのですが、湯河さん、お友達なんかに東北の話をして反応はどうですか。

○湯河氏 全然東北に興味のなかった友達も、話をすると、耳を傾けてくれますし、私の保護者もあまり震災とか防災というものに関心がありませんでしたが、私がこのような団体に入っているので、テレビで情報とかがあったら録画をしてくれたり、家族の中で防災についても話すことや、東日本大震災や阪神・淡路大震災についても話すことがあります。

○古谷氏 辻さん、周りにボランティアということに関心を持っていない人も多いと思

ますが、大学生は時間の制約もあるし、アルバイトのお金をためて東北に行くのも大変だし、どうやって活動の輪を広げていこうと思われませんか。

○辻氏 東北に行くきっかけは、学校で先輩が東北に行った話を聞いて、興味を持って行き始めたので、広めていくことが何より大事なことと考えています。僕の個人的な意見ですが、「ボランティアをした」と言うと、ボランティアに興味がない方は「すごいな」と言います。

○古谷氏 よく聞くのは、「彼らは勝手に行っているのではないか」とか、「そういうふうなことを周りから言われたりする」ということを言う人もいますが、どうですか。

○辻俊介氏 「すごいな」の真意は「自分には関係ないな」というのがあるのです。自分とは関係ないところで「すごいな」という一歩距離を置いているというのが、ボランティアという言葉に対してそういう認識を持っていると感じます。

○古谷氏 ひょうごボランタリープラザの室崎所長が、「みずから敷居を高くすることはしない。ボランティアというのは押しかけでいい、だからどんどん行きなさい。行って仕事がないはずはないし、もし仕事がなかったらそのまま帰ってくればいい」という話もよくされていますが、周りの友達たちをどうやってこれから巻き込んでいきますか。

○辻氏 難しいですね。

○古谷氏 強引に連れていきますか。

○辻氏 うまいものがある、うまい飯があるとか言って・・・。

○古谷氏 仮設住宅に行ったら長沼さんのように歓迎してくれるお父様がいるとか。確かに湯河さんが言っていたように、仮設住宅や被災地を訪ねることによって新たな人のつながりができるということを、周りの友達にも言っていただければ輪が広がるのではないかと思いますので、若者代表としてよろしくお願いします。

○古谷氏 そうした中でもう一つ忘れてはならないのは、企業の社会貢献です。ボランティアの方々も含めて企業でも東北の被災地の支援を続けています。本日このシンポジウムを共催していただいている日本イーライリリーの北野部長から「現状の活動報告と、企業としての役割をどう考えているのか」ご発言をお願いします。

○北野氏 皆さん、こんにちは。日本イーライリリーの広報を担当しております北野です。

日本でリリーは40年、世界で140年の薬の会社です。革新的な薬を患者に届けるため、社員は、患者、御家族やその方々を支えている方々のために、日ごろからいろいろな思いを寄せて仕事をしています。我々が毎年「リリージャパン・デイ・オブ・サービス」

を実施していますが、昨年の10月に多くの社員がそういう思いを持ち、「地域で何かできるのか、自分のコミュニティで何かできるのか」という趣旨でチームをつくり、「チームの絆」であり「地域の絆」、または支援先となっている「東日本との絆」に思いを寄せて活動をしています。

簡単な活動の仕組みをつくることにより継続的な活動ができると思います。2キロで1,000円、ごみ拾いをしたら500円を追加する。例えば去年の活動を紹介させていただきますと、6,300キロという総体的なキロ数で340万円近くの支援ができました。会社は継続的な支援活動というのが重要であるし、会社が持っている強みを生かした支援活動ということで、会社自身が支援を提供しても社員の方々がついてこないとなかなか会社がなぜこのような支援をしているのだと疑問を持つだけです。そこの巻き込みが重要だと思います。今回、ひょうごボランティアプラザがおこなっている「人と人の絆づくり」ということで、支援というものは「物から人」へとつながりを変えていくということの重要性を感じております。

リリーも震災当初は糖尿病の薬のインシュリンを送っていましたが、今はひょうごボランティアプラザの支援を通し、大学生やボランティアバスとか、このような会で人と人のつながりに変えていかせてもらっています。会社としても引き続き、そういう活動が重要だと思います。

○古谷氏 人のつながり、これはボランティアの支援の基本だという話がありました。続いて、同じ兵庫県内の有馬ロイヤルゴルフクラブの大林さん、こちらはゴルフのプレーに来られた方々に募金を募っているそうですか。皆さんの反応はいかがですか。

○大林氏 募金される額はやはり少ないですが、募金チャリティーという形で参加されませんかと言いますと、皆さんこぞって参加してくれます。

○古谷氏 東北に対しての関心はどうでしょうか。募金箱を見たり、チャリティーという言葉聞くことにより、東北への思いを少し寄せるということもあるのでしょうか。

○大林氏 私どもは娯楽業ですので、日ごろのストレスを解消に来られる方が主なので、そういったことを全面に押し出すと怒る方もおられます。ただ、当社も45年ほどのゴルフ場ですが、メンバー様と会員様がそういった企業の方だと、そういった支援をしているゴルフ場というのは「すばらしいね」という声をいただいて、正直な話、私どものブランドにも繋がります。

○古谷氏 本当にゴルフをやっているときでも、東北のことにちょっと思いを寄せてい

ただけるといのはありがたいです。これからもまた言い続けていただきたいと思います。

もう時間になりましたが、村松先生、さまざまな意見が出ましたが、今後の支援のあり方、この後さらに第2部で詳しい議論で皆さんに突っ込んだ議論をしていただきますが、「人が人として生きるための支援」に向けて、この第1部のまとめをお願いします。

○村松氏 まず、コミュニティづくりに力を貸していただきたい。「皆さんにおいでいただくだけでいい」し、逆に「忘れない」という支援も支援です。企業が「ボランティアをするボランティアをバックアップするボランティア」というものもやはり必要ですので継続してもらいたい。それから、いわば戦友のような人たちに来ていただく、それが兵庫ならではなんです。宮城県にいますと、兵庫から来ると何か我々がほっとするのです。それはずっとそうです。それは阪神・淡路があったからですが、東北の被災者はみんな神戸の人が関西弁を話すとすごくほっとするのです。ほっとするところを重要視していただき、ぜひ遠いですが来ていただいて、「5年だったらこうだ」とか、「20年たったらいいこともあるよ」というようなことを話してもらおうと希望が持てるし、皆さんがやっていくぞというときの力になると思います。だから、もはや「自立」していくための支援で、やっぱり「S t a n d - b y - m e」でちょっとだけ支えていただくというような感じが必要だと思います。心の復興ということで、もはや農地支援や漁業の支援という支援はもう要らないと思います。もう自立していただいて、「これからは自分で生きてゆく」というのは必要ですし、それがないと被災地は被災地としていつまでもそのままになってしまいます。それから、若い人はぜひ来てもらって、それを自身のボランティアの高揚につなげてもらいたいし、それがひいては私どもの自立あるいはコミュニティの形成に繋がるということを御理解いただきたい。引き続き熱い支援が必要です。決してボランティア活動のメニューがなくなったわけじゃない。いっぱいあるのですが、それが目に見えてこないだけで、来ていただければやることはいっぱいあります。その話も聞きたいし、いろいろなことを聞きたい、そこから話をしてみたい、それからこれをやってみたいという被災者は多いわけですので、ぜひそれにお手伝いをしていただきたいと思います。

○古谷氏 それと、被災をした子供たちのことを見守っているということで、今の課題をお話してください。

○村松氏 子供たちについては、5年目になってようやく悪い部分がでてきています。いわゆる「フィードバック」です。あのときの5年前の体験を今感じている子供も多いのです。あるいは、福島県の例のように「発育障害」というのも出てきています。それから、

今福島の話をしました。福島に辻さんとかは支援に行っていると思うのでわかると思いますが、「福島の特異性」というものもあります。宮城県だけではなくぜひ福島にも来ていただきたい。「若者から年寄り、そして子供への支援」という意味では、そういう意味では継続的に心のケアをしていただければと思います。

○古谷氏 辻君のにこやかな顔を見てやっぱりほっとするお年寄りがいるかもしれないですけど、これからの抱負をどうぞ。

○辻氏 僕らも行って笑ってくれるとすごく僕らもほっとするので、これからもお世話になります。

○古谷氏 実は、内閣府で去年の末ですが、ひょうごボランティアプラザの室崎所長を座長に「今後のボランティア活動のあり方を考える検討会」というのが設置をされました。去年の1月16日にこちらで内閣府の参事官も交えて「フォーラム」を開催しましたが、その齋藤参事官が内閣府としても前向きに検討をしたいという話をされて、それがようやく年末になって実現して、国としても本格的にボランティアのことに取り組まなければいけないのではないかとということで、検討会が設置をされています。また、ひょうごボランティアプラザの呼びかけで災害ボランティアの交通費とか宿泊費の割引制度の実現を求めて、プラザが2年前から呼びかけた署名に現在35万人分の署名が集まっています。兵庫県議会とか西宮、高砂、そして丹波の市議会をはじめ全国の地方議会で同様の割引制度の実現を求める意見書の可決が相次いでいます。また、超党派の国会議員とか地方議員らでつくる「全国災害ボランティア議員連盟」も、割引制度、活動を支援するための「基金の創設」を内閣府などで実現をしようという動きも広がってきています。ボランティアを社会全体で支える仕組みが必要だと言われますが、せつかく兵庫から芽ばえてきたボランティア文化をさらに定着し発展を育てていくために、本日お集まりの皆さんにも関心を持っていただき広げていただければと思っています。この兵庫にいてもできることはあるのではないかとのお話も先ほどありました。「忘れないということも大事だと思います。」

短い時間ですが皆さんに御意見を伺いまして、これから第2部では東北の支援を続けているまちづくりアドバイザーの野崎さん、東末さんの進行でさらに意見、議論を深めたいと思います。第1部はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

全員ミーティング

(ファシリテーター)

野崎隆一 東日本大震災まちづくりアドバイザー

東末真紀 東日本大震災まちづくりアドバイザー

(意見交換・意見交換の振り返り・まとめ)

○東末氏 皆さん、こんにちは。よろしくお願いします。

前半は、東北の現状というのを教えていただき、これから引き続き御支援したいと思っている方々の少しヒントになったと思います。時間が短くて、個人レベルで、今、東北でどんなことが起こっているのかということをお聞きになりたいと思っている方々が、参加いただいていると思いますので、今からその時間を取らせていただきます。

全体進行を、進行者は東末で、最後のまとめを野崎さんをお願いします。

○野崎氏 東北の方に来ていただいた交流の場なので、パネルディスカッションでもありましたが、神戸でどうだったとか、可能な限り、いろいろ意見の交換をしていただければと思います。最後は、何とかコメントをしてまとめたいと思っていますので、よろしくお願いします。

○東末氏 それでは、早速グループで話し合いに入りたいと思います。

自己紹介カードを出してください。もう一つは、色つきのブルーの、A4半分ぐらいの短冊型の紙を出してください。それから、各テーブルの上にマジックがあると思います。それを1人1本持ってください。色に余裕があれば、各自、違う色のマジックを1本。それからテーブルの上に大きい模造紙があります。貴重なお話を東北の方にもしていただけますし、御支援を实际されている方々にもお話をいただこうと思っていますが、模造紙はテーブルの共通のメモ用紙として使用してください。そのメモはグループ全体の共有物にしたいので、模造紙を使ってメモしてください。

まずはテーブルにどんな方々が座っているか、お名前は座席表でわかりますが、自己紹介タイムを取りたいと思います。自己紹介も、模造紙に書いてください、一人30秒以内で自己紹介をお願いします。

それでは、自己紹介カードを書けていない方は急ぎで書いていただいて、全員書けているところから自己紹介タイムを取りましょう。一通り回りましたら、手をたたいて、私に、あのグループ終わったみたいというのがわかるようにアピールをしてください。

では、これを使って自己紹介をお願いします。

(各グループでミーティング)

それでは、引き続き進めていきたいと思いますが、次は、このブルーの紙を使いたいと思います。お配りしているペンをお持ちください。ここには横書きで書いていただきたいと思うのですが、各テーブルに東北から来られた方がお一人、ないし二人座っているような配置になっています。兵庫県から来られた御支援側の方は、今日のお題は「支援をしていくに当たって課題とか今後の方向性」というのを、ヒントになるような話し合いをしてもらいたいというのが趣旨ですが、いま一度、東北の方々にこんなことを聞きたい、支援の方向性とか課題を考えていくに当たってもう少し聞きたいと思っている質問を、この短冊型のブルーの紙に横書きで今から二、三分で書いてください。

東北の方々にもブルーの紙を配らせてもらっていますが、純粹に兵庫県の人たちに聞きたいことを書いてください。何が好きとか、東北のどんなところが好きとか、そういう質問でも結構ですので書いてください。これをもとに後ほどの議論に入りたいと思いますので、今から2分間でこれを書き上げてみましょう。

時間になったら終わりますので、先に聞きたい人から、まずは質問を大きな紙の上に置いていただけたらと思います。質問内容を言って、それに対して東北の方々が答えたり、知っていれば兵庫の方が答えたりとかそんな感じで議論を進めてください。

おもしろい話とか、ためになる話は、模造紙にメモを残してください。紙があって、一つ目の質問を貼り、その下に議論した内容についてメモをとる。メモ係はつきりませんが、書くのが得意な人で書いてください。それを全体のメモ用紙にしたいと思います。皆さんの質問、できるだけ答えていきたいと思いますので、一つの質問に長々としゃべってしまうと全員行き渡らないのでコントロールしながらしゃべってください。テーブルの上にセロテープがございますので、短冊はセロテープで貼ってその下に書いてください。

時間は前の時計で、5時で1回切ります。時間内でいろいろお話し合いをしてください。

(各グループでミーティング)

時間が来ました、終了としたいと思います。

それでは、テーブルの上に白いA4サイズのコピーの紙があります。それを1枚ずつ

取ってもらって、横に使いたいと思います。横書きに、横の向きに置いて使ってください。ペンはマジックの太いほうを使ってください。議論をしていただいた内容が模造紙のほうにたくさん書かれています。心に残った言葉ですね、お題としては、支援の課題とか方向性につながるような議論をしてというような話をいただいています、それだけでなく、心に残ったとか、ヒントになったという言葉も簡潔に書いても結構です。

今から2分で書いてください。

ヒントになった言葉、感想でも結構です。一人1枚です。

それでは、自己紹介のときにやったように、顔の横に紙を置きながら、私はこんなことを書きましたというのを読み上げてグループ内で共有していただきたいと思います。全員の方が書けたグループからそれを始めてください。では、お願いします。

(各グループでミーティング)

それでは、このグループでのディスカッションの時間、話し合いの時間を終わらせていただいています、それぞれのテーブルでどんなお話がされたのかというのを共有できないのが申しわけないので、今からマイクを回しますからこんなことを書きましたというのとちょっと補足の説明をして、御感想も述べていただきたいと思います。

それでは、後ろのほうから、野崎さん、お願いしてもいいですか。

○野崎氏 こちらは、まず10グループの本田さん、「少しでも一緒に過ごす。一緒に」その心を少し補足してください。

○本田氏 今回いろいろな話をさせていただいて、震災のことだけではなくて観光のことも聞けました。神戸と東北は離れていて、行くのにも時間がかかりますが、直接会って一緒に過ごす時間が大切と思いました。

○野崎氏 とにかく一緒に時間を過ごす、長くても短くても。それが大事だと。

○野崎氏 東北から来られている菅原さん、ラジオ体操と書いているだけです。その心は。

○菅原氏 やっぱり、若い人がいろいろな活動で来て、ラジオ体操をやってもらうというのが一番いいと思ってラジオ体操に。

○野崎氏 向こうでもやっているのですね

○野崎氏 12グループの湯河さん、さっきパネリストをしていただきましたが、なかなかおもしろいことを書いてます。

○湯河氏 私が本日感じたことは、言葉の可能性ということをすごく感じて、その理由で

すが、一緒にお話をするだけでも被災者の方に元気をいただけるし、私たちがまた来ますというそのなにげない言葉だけど、そこにすごく元気をもらったというお話をしていたので、言葉にはすごく可能性があると思いました。

○野崎氏 ありがとうございます。言い方を変えるとコミュニケーションとかそういう言い方もしているのですが、言葉の力ですね。これは言葉に力があるというのを実感して思われた。後ろのグループは以上で終わりです。

○東末氏 では、前グループにいきたいと思います。5グループの入山さん。

○入山氏 自分が直接できるかどうかはわかりませんが、クーラーとかエアコンを夏に冷房じゃなく暖房としてつけ間違えていたというのがあったり、1人で住んでいる方も多いうのを聞いたので、定期的に誰かが見回ってくれたりすることで、その人たちの安心とかもあるのではないかなというのを思いました。

○東末氏 実は、阪神・淡路大震災の復興公営住宅HAT神戸も、神戸大学の学生がお茶をしながら来られない人を見回りにいくという活動をいまだに続けています。それがとても住民はうれしいと言っていました。入山さんの言葉とつながるところがあると思いました。3グループの木下さん、お願いします。

○木下氏 これは最後に個々に書いた言葉ですけど、私は東北に行く、村松先生がいつも挨拶をされるときに、どういう形でもいいから来てよ。観光でも、遊びでも、欲を言えばボランティアをして観光してお土産買ってください、お金を使ってくださいと。とにかく行ってみないと現地のことはわからないということです。だから、できる限り行き続けたいと思っています。

○東末氏 6グループの戸田さん。お願いします。

○戸田氏 私は本当に足を運ぶだけでいいのという問いをさせてもらったのですが、その中で同じ思いをしてほしくないという言葉をいただきました。私がそれを受けて考えたのは、同じ思いをしないために私たちができることって何だろう。何をどこまでどういうふうにこっちでやっていったら効果的なのか。地域の方に根強く浸透していくのか。そういうことをみんなで考えることじゃないかなと思いました。私たちの団体も今4年支援させてもらっている中で、今までと変わった支援の仕方をしていかないといけないという話になって、でも地域の方はどういうふうなことを求めているのだろうというのをすごく疑問に思っていて、その中で私たちがやりたいことを現地でやるのではなくて、現地では消化不良かもしれへんけど、でもこっちでこういうことを言ってたとかそういうことを伝えて

いくことが一番の支援になるのではないかなというふうに思いました。

○東末氏　　こっちでもやっぱり向こうで得てきたことをしっかり伝えるというのが、東北の皆さんのためにもなるかもしれないし、こっちで住んでいる側としてもこんなことが起こっているということが、いずれ兵庫でもまた起こる可能性もありますからね、それを伝えるためにも東北のためにも兵庫のためにもそれが必要なんだろうと感じました。伊藤さん、きょうの話し合いを経てどんな感想をお持ちなのかということをお話していただいてもいいですか。

○伊藤氏　　来てくださることがものすごくうれしくて、それでどんなに風が吹いても、荒れても、窓拭きとかいろいろやってくださるから。おばさん方で何かできることがあったらという感じでカレーをつくりました。

私たちはできる範囲でやっていますので、余り気にしないでいただきたいと思うのです。来てくださることが本当にうれしくて、きょうもこういうふうに参加させていただいてありがたく思っています。

○東末氏　　何か御支援のつもりで行っているのにたくさんおもてなしをされると、本当に私たちは緊張するのですが、「気にしないでね」、「来てくれるのが本当にうれしい」というようなお言葉でした。

では、名残惜しいのですが、この時間を終わらせていただきたいのですが、野崎氏から、今後についてコメントをいただきたいと思います。

全体総括

○野崎氏 今後についてではなくて、きょうの総括コメントになるかどうかはわかりませんが、感想をお話して終わりたいと思います。

きょうはいろいろなキーワードをたくさん出していただいて、私自身は復興のまちづくりの高台へ行ったり、区画整理だとか、そういう応援を主にやってきたのですが、仮設に住んでいる方、それからお一人お一人の被災者の方々と直接触れ合うボランティア活動は本当に大事だと思っていろいろなお話を聞かせていただきました。

被災地も5周年をもうすぐ迎えます。神戸のときの話も聞かせてほしいという話が先ほどありましたが、神戸でも5年というのは一つの大きな節目でした。ハード面の復興が大体5年で一段落して、公営住宅もできて仮設が解消されていった時期が5年目ですが、実はそれ以降、いまだに復興が終わったのか終わらないのかわからない状態になっています。兵庫県も復興のフォローアップをする委員会がありまして、20周年で終わるのかと思ったらもう5年延長するということです。いまだに復興フォローアップということを行政も取り組んでいる状況です。ただ、だんだん復興なのか平常時の課題なのかどんどん見えにくくなってきています。そういうところで、「コミュニティとか暮らし」というようなことがこれから大きな課題になってくる。「コミュニティとか暮らし」というのは、余り行政がやるものではないです。それぞれ被災した皆さんが自分で取り組んで、自分たちで話し合いをしてどうやっていこうかという知恵を出し合わなければいけない、そういういわばソフトの暮らしのほうの復興の本番が5年で始まるのかなというふうに感じています。神戸の場合も同じでした。それがなかなか今でもまだ続いているという状況であるということをお話しておきたいと思います。

きょう、いろいろ感想をいただきましたが、だんだん支援に行っているつもりだけれど、いろいろ触れ合いをして、カレーのお話もありましたが温かい触れ合いが生まれて、かえって行ったメンバーが感謝の気持ちで帰ってくるというようなことが起こっています。ですから、支援する側とか支援を受ける側というふうな関係がどんどん変わってくると思います。

実は、一昨年(2019年)の11月にハードのほうのまちづくりのフォーラムをやりました。そのときも最後の締めでパネルディスカッションのメンバーがそれぞれ言ったのは、もう支援じゃない。逆に、我々が行くことで学ぶことがたくさんある。だから、「一方的に何かをしてあげているのではなく、学ぶこともある。」だから、これはもう「支援」というよりは

「交流」をやっているというふうに捉えるのがいいのではないかというのが実感でした。ですから、これからもボランティアバスは続けて若い人たちを東北へ送っていきますけど、受ける側も支援をしてもらっているというよりは、若い人たちと「交流」を続けているのだという気持ちで受け入れをしていただくとうれしいと思います。

きょうは皆さん、遠いところから来られた方々も、地元できょうのために時間を割いていただいた方も、長時間にわたりましたがありがとうございました。今日のいろいろな思いを残しながら、今後またいろいろ活動をしていただければと思います。どうもありがとうございました。

「幸せ運べるように」合唱

○本日は、学生ボランティアとして参加させていただきました神戸親和女子大学 ユネスコクラブです。私達も仙台を中心に東北のほうでボランティアをさせていただきまして、今回このフォーラムでたくさんの方の貴重なお話を聞くことができ、早く東北へ行きたいなという気持ちと、これからも支援を続けていきたいなという気持ちになりました。

皆様、資料にございますこちらの「幸せ運べるように」の歌詞をお出しいただければと思います。この曲は阪神・淡路大震災の後につくられた曲で、兵庫県内の小中学校を中心に幅広く歌い続けられている曲です。私達もこの曲を東北で歌わせていただく機会もたくさんありまして、とても思い入れの強い曲となっております。御存じの方もおられると思いますので、皆様と一緒に歌えたらいいなと思います。今回、アカペラになってしまうんですけども、皆様よろしく願いいたします。

(合唱)

閉会あいさつ（高橋守雄災害支援アドバイザー）

皆さん、こんばんは。ひょうごボランティアプラザ災害支援アドバイザーの高橋です。本日は、震災20年の締めくくりのフォーラム、そして明日から阪神淡路では新しい21年、そして東日本では間もなく5年を迎えます。共催していただきました読売新聞社、マスコミの皆様、本当にありがとうございました。日本イーライリリー株式会社、有馬ロイヤル株式会社ありがとうございました。そして、基調報告をしていただきました東北大学の村松先生、そしてパネルディスカッションの野崎先生、東末さん、本当にありがとうございました。最後に親和大学の皆さん、合唱「幸せ運べるように」本当にいつも楽しい音楽をありがとうございます。

たくさんの方に全部名前を挙げてお礼を言いたいのですが、何よりきのう東北から12時間かけて来ていただきました愛島東部仮設住宅、箱塚桜仮設住宅、そして東松島市小松南住宅の皆さまいろいろな課題を持ちながらきょう神戸にお越しです。

私達は、明日から新しいステップの阪神淡路大震災21年目を歩みます。そして、東日本では間もなく5年目を迎えます。我々は兵庫から、遠いところからボランティアが行きやすいそういう社会構築を目指して、災害ボランティア割引制度、災害ボランティア割引制度で多くのボランティアが遠くからもすぐに被災地に駆けつけられるような制度を、世界で初めて日本で立法化してもらおうと活動も行っております。皆さんのほとんどの方が署名をしていただいたと思いますが、さらにこれからどんどん運動を進めて、一步一步

前進していきたいと思っています。本当にきょうは熱心に御討議いただきすばらしいフォーラムになったと思います。最後になりましたが、皆さんの御協力に感謝しまして、あいさつとします。本当にありがとうございました。（拍手）